

「千尋の浜草」（翻刻と解題）:本居宣長の門人加藤吉彦の入門旅日記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7359

「千尋の浜草」(翻刻と解題)

— 本居宣長の門人加藤吉彦の入門旅日記 —

深 川 明 子

凡 例

石川県鳳至郡能都町、河村喜平氏所蔵の「千尋の浜草」(能都町指定重要文化財)一冊を翻刻した。翻刻は次のような方針で行った。

一、出来るだけ原本に忠実であることを旨としたが、文字はすべて現行通用のものに改めた。

一、句読点は原本にはないが、適宜付した。ただし、読点は最少限度のものにとどめた。

一、本文中には適宜濁点を付した。ただし、次にあげる語句は、原本に既に濁点が施されていた。「()」内の数字はページと行数である。

したしきどち(41上) いだして(42上16) よべ(42上20) ふ
くどみ(42下18) ちび(43上17) ほうだつ(43下14) 七くぼ
(43下21) つばた(43下25) さとび言(45上) もりだ(45上21)
白きど(45下1) かんじ(45下17) かいがけ(47上12) そば
(47上19) よべ(47下22) くぼた(48上) どんど原(48上18) め
かづて(49下28) ことども(50下12) 尋ねずて(50下12) たつき
(50下25)

一、改行の箇所は原本通りである。ただ、本文は改行の箇所をわかりやすくするために一字下げて、その頭に○印を付した。

一、本文中『』を付した部分は朱書の部分である。

一、原本の歌の冒頭には「」の符号が朱で付けてある。なお、『師点』とある歌の場合の符号は「」であるが、すべて省略した。

一、原本の誤字、衍字と思われる箇所には、本文の右側に「マ」
と記した。

一、虫損のため読めなかつた箇所は□□とした。

本 文

○神風のいせの圃に、千とせよこもる松坂の本居大人はいにしへま
なびの万のこの葉に名だよりて上下の人くもめでたくなん有け
る。されば、わがかくまで徒に過にし程を思ふに、うまれえてしより
十とせあまり三とせとなんいづるに、父はうせ給ひて母なん人の手に
そだて給ふ。もとよりをみなてふものゝ所作としてうちをのみつか
さどり侍れば、我うぬまなびのたどくしき道びぎのたよりもえせ
ずなりぬる。かくてはたとせをへて、やうく人の交りをすなる比ほ
ひにいたりて、やつこがつたなきころはへにもおほけなきわか道
のしたはしく思ひ侘つゝ有けるが、過にしよとせのさき、我御師なる
度会の益孝此里へはじめてわたり侍るに、かの本居うしの学びの道
の物がたりなんどつばらかにののしられける。やつがれも時きたら
ば、かならず此うしの前にかしこまりて、かれこれふみのはしくさ

ゝやかなるあきらめなどなしけんと思ふ年月もつもりせまりて、ことし寛けき政のこゝのとせいかなる神風やさそひ給はん。竹の都のすぐなる道におもむく事、是又母のまめやかなるいさほにやあらんと、いともくうれしくて、その旅の物おさめけるふくろにかきつけるた、

おもひいるまなびの道は遠くとも限りある身のかぎりたのまん

○さつき八日、わがやどりをたつ。よひの程より空うちくもりて雨も降やまず。かくてはあすたゞん事のわづらはしく思ひしが、今なん笠をとる事になりて雨もおやみて心よくおのくしたしきどちに見をくられて藤波の浦里にいたる。此里をなかば過行比は又雨頻りに降つゝ八王地の神の森にて雨ごろもとり持きて波並の里にいたる。此所はもとよりわがうみのこの柴ひを祈る地にて、三やけ四やけ旅立んことぐきをのべける。此所のたづきとて、四つの時折く漁取網をおろせしが、かの網といふ物の筭へ事せんとおのくうち集へ居つゝ、わが参宮のことほぎせんと酒なんどもてはやされて暫く時を移しける。わが里より此所迄は一里あまりの道なり。それより半里あまりへて矢波の里にいたる。此里の半横道にぬけて山こえせんと二二町程よちのばれば、田子なるものゝ声してわが道ふみまどひし事をとがめてまことの道をおしへける。かの田子なざけらしきものにていとうれしく、それより又三丁ばかり山路わけ入ば、なか／＼に小松小杉など生出てひろめなる所あり。こゝにてかくまで過にしうら／＼をながめやりて暫く雨衣うち敷たばこ火なんどもとめて休らひしが、折からの雨曇にわが住浦山も幽に見やられ、猶この末山深くたどらんと思ひわびぬれば、いともく胸せまりて、

行くもかへり見やりし我里の山がくれなるさみだれの空

扱のぼり下りの道をつたひ一里ばかりたどる程に、神道といふ里に

出る。それより村並八の田といふ所にかゝれば昼の程も過なん。角なる家に入て茶を乞ひ食をもとめて見やるに、しめやかなるなる雨のたゞさへ物うかるべきに、おのれくとしめし置ける早苗とりになる歌のすなほる手ぶりめきていとおかしく。扱それより院内といへる里に大峯とてこだかき山の有ける。その腰を過て本江といへる里へかゝりしが、又少し道まどひ心なるを早苗取をうなに尋て亀が原にいたる。すべて八の田より此所まで二里余の間は左右山の中を流るゝ川伝ひの道にして、夏秋のうちは田つくるいとまに鮎といふ魚をとりて稀人のもてなしに鮎なんどつくりてたくはへける。それより例の山道をたどりて伊久留といふ里へ渡る比は又一頻り雨いたく降つゝ、折から郭公の初声いとめづらかにて一くさ歌の口ずさび思ひ侘しが、此程の心つかれにや足もいたく日もうつろひがほなれば、行末のとまりいそぎにむなしく過ぬ。此里より中居といへる里の道の程とはまほしく過しが、獵人らしきおのこに行逢て問へば、是よりまだ二里余りも有けるとこたふ。猶道く／＼のつかれにやあらん、鼻より血などはしりて貯へし紙もとりあへず、草のはとりちざりてしばし凌つゝ行ほどに、宮く寺く／＼の森人家軒をならべし所まのあたりに見やられて、例のいたはしき足引ずりかの所にいたるほどは、はや入相にかゝりて宿りをもとむ。

○九日。きのふのけしきもよひにして、中居より舟たのめて嶋山渡らんとけさより待侘しが、漁りのいとまにさへられて舟もえず。昼の程に時もうつりぬ。

五月雨のはれぬほどよりけふは又待るゝ舟のうきをこそおもへ今や舟出を告来りし時にいたりて、四柳よしみちにわかれの言葉のべける。もとより此ぬし、我伊勢の地へ趣くを伴はんと兼ては契置しが、今少しさはりの事ありて伴はず成ぬる。必我跡したひ侍ら

ん事をかたくうけひて舟にのる。さて見え渡る山く嶋く、空はくもりがちなれど昼のほどより雨打はれていと心ちよし。されど例の舟は心いたましくて雨衣旅袋など枕になしてしばらく夢を結ぶ程にかの嶋山の岸につく。舟木勝房のもとにやどる。折から人く集へ有よしにて、おのくまどぬせし。そが中に年月此所に吟ひ侍る定之といへる人、もとは国つかさにつかへ侍りしが、あやしき罪事をうけて漂ひける。されど生膚断死膚断のわづらはしきめものがれて左遷の月を見侍る事、さすがにものふ魂ありていとめでたく、此ぬしつるぎとりもてる所為にほこり、かつは風の流るゝ遊びにもすぐれたるしれものにて、いつしかまみえんことをちぎりてしかど、折ならずして過しけるが、此程旅の別れをのべんとこの所にたどり侍りしを、ふしぎにかの定之にまみえしはまかるものゝよみがへるこゝちしてその思ひをのぶる。

とにかくに長くも祈る命かなかねてたのめし人にあひしも其夜はこゝにやどり、まれ人の酒もりみつ緒の音しめなんとさゝめかし。酒えぬわれもそのまどるにつらなり、つたなき声をいだしうき人のためかや、今は冬枯てなど今し世の人のすき物なる一ふしもてはやして、こよなふ鳥がなく比まで更しける。それよりおのく枕とりもちてまどろむほどに、朝日のあざやかなるもよほどたけしまゝに起出しが、日のあてやかかつはよべのたはむれ事など思ひ出しておのく面でもあわせず有ける。かくて旅の心いそぎに立立んことをのべければ、あるじ袂を引て、けふはこよなふ雨もいたく降ける程に今日とどまりけるよししひていひからかひける。かつは我せうとのひめの親みも忘れがたくてわりなくとどまりぬ。

○十日。けふはひるまで雨はれやまず、昼より空晴て心もおだやかなれば、あるじ定之ふたりをかたらひ、今し時にとりての歌の題を

三つづゝ探りける。そのわれにあたりける題のうた

盧橋薫枕

みしまゝの景やむかしを忍ぶらんはな立花のにはふ枕に

水辺夏月

夏かりの声間を遠く澄月のさはらぬかげを見るがすゞしき

忍恋

しのびえん中こそいとど苦しけれ我より外にもれぬなみだによみをはりければ口もくれその夜はあす立ん心いそぎにとくいぬ。

○十一日。けふは此程にかはり空心よくはれて向田をたつ。あるじの下男をつれて上り下り半里余りの山道をこえて二穴といふ所にいづる。それより半里程の舟渡りして福浦といふ地方へつく。それよりふくどみみむろなど浦伝ひの道也。向ふは屏風崎筆嶋几嶋など見え渡る。

手習はん人に見せばや能登うらのふでもつくえもおのがうらく扱屏風ざきの間より和倉の温泉の嶋なる弁才天の森幽に見ゆる。扱て余程道を行て、太田と云所に出る。向ふは石崎とて一村有。なべてさし網の漁取る所にて、旅の浦々嶋々など行廻る。此所のならひとと適漁の際に家居しける折は、男をふなのかたらひのしらせに門く戸をさし、その前に、械といふものを立てそのしるしとす。いづれの人くもそれを見て心得ける。此かひ立といふ事は此所のをきて迄にてもなく、紀の国加田と云所にも此ごとくなりとて連歌俳諧の恋の寄詞にも多くあつかひける。いづれみちのくの錦木の類ひめきていとおかしく、それより沖の嶋の弁天とて有。すべて弁天毘沙門天の類ひの号はやまと魂めかずていとあやし。それより余程行て七尾といふ町家にいたる。福浦より七尾までは三里余りにして

すべて渚道也。扱七尾の所縁ある方一宅三宅尋て、田島の中道を通り本宮の森に出る。此社は神名帳に所謂能登生國王玉比古神社なり。夫より小石まばらなる道を行て、飯川黒木羽坂よし川能登部上村にいたる。七尾よりはまで三里余にして右は畠山の古城跡石動御山など烈れり。扱その上村余喜比古神社の祢宜清水何某のもとを訪ひける。折ふしあるじ勤事ありとて留主なりける。其家に久しく代り勤などしける直記といへる人にまみえて暫風流の咄しなど時を移しける。扱清水といへるあるじの性にすがりて詠置ける。

君こゝに宿し尽せぬ水なればなほ行末の旅やきよめん

かくをくりければ、かの直記我に別の句をおくられける。夫より徳丸能登部下村と云所に能登比咩神社とて有。毎年氣多の神社七尾へ御出の祭は二月初申の日にて、その還幸の時此社の前にて稗粥を供し奉ること古例也。それより金丸の里をたどる。通りに社あり。此神は諏訪を祭れり。俗言にこれを鎌の宮といふ。いはゆる此社の後にいとおほきなるたもの一木有。此木に毎年七月末の祭りの時は新鎌を拵へ此木に打込事古例也。いづれ焼鎌の敏鎌をもて打えらぶの心ならんかいとゆかしく。夫よりかしま地ちと柳田まですべて三里余りの瀉あり。此ほとりの人々此瀉の釣網を所為として明暮いとまなきさま思ひやられて、

ひくあみのうきめにもれぬ瀉魚の鯉とは人のおもはざらめや

扱それよりちと柳田などたどりて一宮にいたる程は日も暮にけり。扱そこはかとなく宿たのめてやう／＼ある宿につきぬ。扱大宮司にまみえてわが蒙りし公役のことわりなどのべて宿へ帰りぬ。

おほなむち神の岩屋のいはずともわがうみの子のすゑや守らむかくは詠て大宮司にをくりけんと思ひけるうち忘れてむなしくなりぬ。わけてこよひこそは物うけれ。此村に宿などことわりてかさゞ

りける。ある家になどをゆるされて、

思ひきや佐野のわたりに宿なきをけふの今宵のうきにしれとは扱此一宮は大己貴尊にして神名帳に氣多神社是なり。四十三座の大一社にして御敷地八丁四方あり。十一月鶴祭の時往昔安倍定任勅使として万歳楽を奏すなど古記に残れり。二月初申の日は御出祭とて七尾本宮へ御幸、おの／＼ねぎなど馬上に供せける。此馬に人々迎火を焚などいふ事有。三月四日はなり出の祭とて石動の坊等頭巾篠懸をかけ螺など吹て来るよし。此所は国分寺にて國／＼の道者など入込ける。もと国分寺と申は人々の学びの道により集へし所に立置れしを、今はたゞ寺の名のみのやうに心得しむいとあやし。今し世に幼きものに手習ひなどさせし師家を寺小屋といへるはそのことのもとなり。色／＼旧記も有よしなれど爰に略く。

○十二日。一宮を立。きのふにひとしく空晴て心ちよく、鳥居浜より三里が間は浜道にて、左はほうだつ山平やまなどつらなり、右は青海の野果なくて鳴音のいとおそろし。

はてもなく思ひ越路の海原と名にこそたれ波のひた／＼

それより今浜に出る。是より高松まで二里余りの砂道、所／＼に渡り川有。水の出る時はゆき／＼などともまる事有。こゝに能登加賀の界とて、はづれにしるしの松あり。扱高松につきて昼の食を求め暫く足を休め立出る。是より一里半ばかり又砂道をたどる。中程に地藏堂あり。此間を七くぼといひて炎天には人馬の足を焦し、冬枯の比は雪吹雪のわづらひ多しとなん。それよりうのけといふ賤しき一村あり。かの難所を越來し往來の旅客もかならず此所に足を休めける。夫より津幡迄一里半並松の間／＼村をはさみて左右は皆畑也。扱つばたより金沢までは四里の所にして、まへのごとく並松村並田畑見渡しの道也。殊にも此つばたは能登越中の落合にして、よのつ

ねに旅客馬の鈴など振立ていとにぎはし。うのけより旅客と伴ひ四方山の物語などしつゝ日の入相に金沢へつき浅野川橋もとに宿る。

○十三日。けふは此程にかはり朝より空打曇る。城下の長さ二里余りも有ぬべし。浅野川才川の大橋打渡りて神明宮あり。それより町を過て例の並松左右は田島あり。左の方に雪の白根山見え渡る。此山は古歌にも名だよりておほよそ二日路も見やりける。けふはくもりがちにてさだかには山のすがたも見えわかず。行末我國つかさのしめし給ふ地も次第にうとくなりけるよとおもへばいとつつかしく覚えて、

きのふけふ過來しかたをながれむは日路にぞくもる雪のしら山扱それより野々市松任などを過て柏野といふ所に昼の物喰ける。扱立出る。けさよりの空もよひにや雨頻りに降つゝ雨衣取きて少しばかり並松を過れば、水嶋の夏ヶ乃水とて一度かきりにわきとまりける井あり。奥は観音たゝせ給ひていづれよりもふで来て男をふなの艶なる粧ひをなせり。あやしくも又とつとて、

夏来ぬといひし斗に此里の法のちかひにむすぶ井の水

それよりあをの川手取川ともいふ。此間一里ばかりにして五月雨の水かさ増る比はゆきまのわづらひ多くていとおそろし。其をりはみなとゝいふ所へまはりぬ。此湊も水高き折は渡しもとまる事ありぬべき。けふは昼よりの雨に此あを越もこよなふくるしければ、

さみだれの降さへうきにましてけにあをの河原をけふや越にきそれよりあを村を過て寺井といふ所にかゝる比は雨もいたく降、足もつかれ、是より一里半斗りあるべし。小松の城下にとくやどりぬ。宿は油屋大右衛門とてやまと魂ありける人にて歌よみ句をゝくりぬ。

五月雨のうきを忘るゝ此里の小松がもとにたびねしつればわが秋の帰るさをかならず宿し侍れとたのめをきてわかれぬ。かくあるじの風流なるをしりしは按摩が物語し故なりける。

○十四日。きのふにひとしくぬれゝ小松をたつ。町のはづれに山王の社有。それより少し並松を過て多太八幡宮といふ額のかゝれる二柱有。此社は篠原の戦ひの折、木曾義仲願書を納め給ふ。斎藤別当実盛のよろひ甲此所の宝物になりぬ。旅客開見のために入口の立右に銘を彫つけける。行末の心急ぎにえ拜まねどかの実盛の腸など思ひやられて、

武士のあはれをしりて古郷へかへすたもとの名こそくちせぬ

扱並木の道わけ行て櫛といふ所にいたる。此里は旅人などどどめて浮れ女など遊ばせし所也。それより少し行て今井に出る。此所より那谷寺へ近し。此あるじの僧は其さきわがよみ歌などたのめてわりなきむつびをなせしなればいとゆかしけれど、例の心いそぎにえ行ずなりぬる。右のかたに今井の瀉見ゆる。それより月津にたどる。此程の足痛に馬さしのもとへ立寄て馬など乞けれど、我里よりの帳をしるしもらせしにて心づよく聞入ずて、たどゝしく例の足引ていぶり橋といふ所に至る。此所に運如上人糞篠の古跡とて立石有。此謂を金沢の宿にて賤しき嫗の物語しけるは、かの上人ある賤がもとへ立寄らせ給ふて一宿を乞給ふに、あるじの妻心つよくて聞入ず。あるじのいはく、さあらば場のうち成ともといひてやどしける。折から粽の時節なればかの粽を上人乞給へども急に聞入ず。しひて乞給へば粽一つ扱つけける。其所に年々やさしき篠生けるによてかくなづげしとなん。

法の人深くもたのめ飯そめの篠の一夜の枕なりとも

それより二里余り行て、大正持の城下に至る。此所の茶屋に昼の食

もとめて関所にむかへ、わが姓名をのゝしりうこまり通りける。扱一里余り行て、橋といふ所にいたる。此所の上なる茶屋には常に粽など拵て人々をもてなしける。其茶屋の末に並松あり。是なん加賀越前のなり。それより一里半余り過てはそろぎといふ所にいたる。此所に関所あり。それより二里斗小松あぶらぎなど生茂りて昼も物おそろしき所也。熊坂松嫁落しなどいへるけはしき谷あり。さとおび言にいひなせる事なれどさも有べき所になん。今し世にも其名残とて物淋しき雨の折はかのあやしき類ひのものなど往來の妨げをなせし事も有なん。

白波の名にこそ立れ此原のしるしの松はふるかひもなし

それより所々の休所を越て金津といふ里にやどる。此里は旅客をとどめて浮れ女など遊ばせん事をしひける。こよひ相客なき宿にとまりければわけてわれをしひすゝめしかど行末志の事ども多くてえ遊ばず。其夜はふしぬ。

○十五日。例の雨げしきにて金津をたつ。二里余り平道を行て長崎といふ所にいたる。此所の少し奥に新田左中将義員の廟所御形などあり。入口の茶屋に物たづねける。かの寺のさまなどつばらかにかたりける。義員はおほやけの人にて敷嶋道にも名だより、かの移り香の兎など床しくて、

哀君かゝる越路に跡とめてなほうつり香の思はるゝかな

それより一里半ばかり行てもりだといふ所にいたる。舟橋ともいふ。村のはづれに舟橋あり。扱て渡りて一里余り行て福井の城下にいたる。昼の程も過なん。大橋のもと茶屋にて食を求め、それより二里余り過て浅生水にいたる。雨も頻りに降、足もつかれぬ。道連のなさげに馬など雇はんとしけれど余りに価心つよくいひなせしによて扱やめぬ。それより水落へ一里なり。扱それより又一里行て鱒江

の城下にいたる。それより府中迄は一里の所也。此間に白きどの渡りをこえぬれば足も疲れ、日も暮はてゝ府中の町へも遅くつきける。かれこれ宿をたのめけれど独り旅のことわりとてかさざりければ、庄屋と云家につきてわが身の上駄賃帳などを見せてわびしき宿につきぬ。相客とおほしくて妓女なども遊びて目も心よくあはせずなりぬ。

○十六日。此程の通り雨降つづく。我所よりたのめ事ありて川裾明神宮にまうづ。雨衣ほどき祈願の志をのべて町のはし徑を伝へ、一里ばかりたどりて今宿といふ所にいたる。扱それより一里、駒本へたどりて茶屋に足を休めけるうち、わが隣の国なる越中の工みなる人二人三人に連立、わが身の程をかたりあひける。此人々心もちやはらかなる人々にて、旅の物くるしさも、いたき足のつかれもしばしは忘るゝばかりに成に。行道筋左の方に高き山見え渡る。此山を雛が嵩といひて常は人ののぼりえず。七月廿二一夜、祭ならではもうでずなど里人の物語ける。それより一里行て湯尾にいたる。是より今庄迄は一里の間にして、中に湯尾峠とて余程よちのぼる九折也。真上に茶屋三つ四つ有。此茶屋に痘瘡の神の宿りける謂とて孫嫡子といふて串指餅など売る。往來の人々此のほり下りのつかれにや、かならず此所に休みて餅を喰ける。かつ痘瘡せぬ子など持たる人は此呪にもとめて帰りける。扱今庄に昼の食を求めて出たつ。此末に左りは京右はつるが若狭道とて別れ有。その左りにつきて二里余りたどりて板と云所にいたる。此間は山左右にあり川音などしていづれ物凄し。筆か淵など云所ありて、雪つもる折はやもすれば人あやまつ事有にていと心細し。此所に又、越の今石動の人來りて伴ひ五人になりて、道のうさを忘れうたなど調ひ連てたのもしく覚ける。板とりのはづれに関所あり。夫より中の河内までは三里

の所にして、一里半程少しづゝのどん／＼のぼりにて人／＼息もつきあへず、うきをこらしてよちのぼる。真上に栃の木峠とて茶屋二三軒あり。此所越前近江の界なり。かの家には大園秀吉の謂ありて大きな茶鍋など飾りける。爰にも餅酒など売て、思ひ／＼のうきを休めに餅酒などくひのみ休らひ。又一里半余り少し宛下り／＼てかの中の河内につきぬ。此所はいたつて山中にてあるなれどよろしき宿ありておの／＼心うちとける。此所へたどらぬ先に時鳥の声音信ければ所がらゆかしくて、

うき旅をすさめにけりな郭公猶わけ入ん山のしるしに

○十七日。けふは例のごとく空打曇りて雨降。濡／＼中の河内をとくたつ。一里余り山道伝へて椿枝峠の茶屋にいたる。それより又一里余り下りてかの在所にいたる。扱夫より一里斗行て柳ヶ瀬と云所につく。此入口に関所あり。此関はをみなてふものをしらへ給ふ所なり。此村に腰を休めて二里余り石高なる道を伝へて木の下といふ所に出る。すべて此辺りは桑など多く作りて蚕の爲にする所也。かの木の本に尊き地蔵あり。昼の食求んと堂の向への茶屋に入り休ける。かのあるじにかの佛の謂などこまやかに尋。余程ゆるうちもはや山道もはなれたる故やらん、空珍らしく晴上り雨衣旅袋などしたゝめけるうち長浜迄の戻り馬ありて、三人の連のかく迄持來つる旅の物、わが旅袋もひとつに馬背にあづけて馬引連打立ける。かの湖水の入江も少し影見え、伊吹山も詠められて、

近江なる伊吹の神の出風にはげしくはらへ旅のけがれを

木の下より長浜までは四里余りの道にして所／＼に足休め、ひとつ二つの川打渡。三日高きに長浜にやどる。きのふけふかの三人に連立明日は既。わかれんとすなれば、いき後の形見にもとわがつたなき言の葉のはしをのべてをくりけるよしひてこのまれて、かのわ

かれの歌を道／＼思ひめぐらし、此町の店へたより短冊求めてかの宿につき書をくりけるうた、

此ほどの旅のすさびを今ははた別るゝうきに思ひしるしも
其夜はわかれの酒などもてはやしつゝふしぬ。

○十八日。朝の間は霽立てうすく／＼に長浜をたつ。此所は湖水の辺りにして、それより海見え隠れに田島の道を伝へて二里余りたどり米原と云所にいたる。夫より並松村の間／＼にはさみ一里余り行て鳥本にいたる。此入口は東海道北陸道のわかれ道ありていとぎはし。夫より又ひとしき道を行て高宮に出る。此間は一里半ばかりも有ぬべし。小野小町の墓所とてあり。すべて此小町の墓はいろ／＼の説有ていづれさだかにわけがたし。扱高宮に昼の食求め休らひ、それより二里余の道を行て愛知川をいふ所にいたる。此所に伊勢京のわかれ道ありければ、此程の名残おしみつゝ、その中に老めける人を、左衛門といひその次を孫右衛門といひその次の若きを三十郎といひける。わけて孫右衛門といへる人はおろかなる身にも我大御国のおしへのはしを尊み、もとより工みなる身なればわれに神拝の式のはしをしひてさづけまほしく乞けるに、まかせてその志にかんじ旅袋に有あひける紙取出していさゝかそのわけを書しるしをくりぬ。此の程わがかくこゝろざしことにのぼりけるに思ひやられて、いと／＼ゆかしく有ける。此程後先二三十人おまりの道連、僧女かちに打連ける中に、女御りわが伊勢詣の事をうらやみて伴ひけんことをしひてたのめける。かつはよの連人もわれをしひてたのめける志にわりなくひかれて、一里余り未なる所にいせ京のわかれ路より二人伴んとしけるうちに、休所の松陰よりさもあやしげなる形して、かれも我伊勢行の事を聞て深／＼たのみ伴ひくれなどしひてたのめける。所はいづくぞと問へば我国我所より二三里あたりにて秋

冬のはじめには柿など売出せる神道といふ所のもの也といへば、さすがにをほよそになしがたくて是もひとしく伴ひける事になん。扱わかれ行京道のかた越見やれば名におふ鏡山もほのかに見られかの旅人行末など思ひて、

旅人のわかれに向ふかゞみ山かげ見ゆる迄くもらずもがな

扱夫より三人打連て一里余りも淋しき里くをたどりて八日市といふ所にやどりぬ。

○十九日。朝より空打齋ごとく八日市をたつ。此間三里余りの平山松原村くをさみて石原といふ所にいたる。此間に布引山見えわたる。

五月雨のはれぬながめをけふは又日にさらしけん布引のやま

扱石原よりかいがけ、此間まへのごとくの道にして二里余りの所也。此所に昼の食を求め茶屋のおうなに行末の事どもつばらかに尋ける。土山まで二里の道程にしてすべて山道也。笹峠とて松原を余程のぼりはなして又平山を余程よぢのぼる。近江路の山、伊勢路の山も四方につらなれり。雲は山の腰に帯て唯ときめく鳥の声のみ、旅人荷馬なんども息つきあへずくるしむさまあはれなり。

旅人のおふさぎるさに白露の命かけけん篠の峠は

それより半里余りも又下りて土山につく。爰にて休みそばなんどくふて行末の道しるべ尋つゝ、土山のはづれに田村大明神の社あり。爰にて笠をぬぎ余程入て社の前にぬかづく。

武士の名をすて流せ田村川きよきめぐみは神やしるらん

それより田村橋わたらんとすれば番所ありて橋のちんなどとりける。もと此川は橋のたよりなき所なりしを、過にし安永の比洪水ののちより橋かゝりてゆきゝのわづらひなく、其所とて橋詰に制札を立ちける。夫より上り下りく上りの間く松しげりて道程一里余り

もあるなれど、けふの山道のくるしさにつかれてこよなふ遠く覚ける。扱のぼりつめて小き森に坂上の田村丸の社あり。是なん近江いせのさかひなり。夫よりだんく半里程も下る。爰を鈴鹿峠とて名におふ鈴鹿山の腰に下り出る。此山はもとあやしき神のすみたる所にして、今し世にも残りて鬼の鏡石などてあり。常は人ものぼらずあんなれど、正月元日には此社の祢宜神秘にてよぢのぼるなど、宿りしをうなの物語りしける。麓に鈴鹿明神の社岩畳に立せ給ふ。御被殿御馬屋敷ありて御敷地のけしき甚しく、しばらく笠をふせ我ねぎごとを申しける。もと此鈴鹿山は我れ過にし三年のさき十月八日の夜、富士の山音羽の滝此鈴鹿山三所の名だゝる山を夢になん見ければ、かくまで過こしうちもわけて心にかけてあんなれば、けふはた此御山のすがたを拜みつることのいとくうれしくて、

鈴鹿山もとみし夢の面影をけふこそあふげ神の恵に

それより又少し下りて岩屋の観音立せ給ふ。すゞか川の水は石洗ふ音に物凄く関の昔はいづれともさだかならねど名のみいと味し。夫より又余程下りて坂の下町のにやどりぬ。宿のをうないとやさきものにてかの山のいはれとて、此里に火のわざはひ高津神の災などもなく、もとより宿くのおみな月のさはり火のけがれなどかたくいみ侍るよし、又空海ののろひ給ふとて此里に蚊のわづらひなんどもなく、いづれ神の徳みのいとかしし。

すゞか川岩波高く行水のよどまぬかげを見るぞすゞしき

○二十日。よべより雨風さはがしくぬれく坂の下をたつ。此間一里半ばかりにして山道里あり。左に筆捨山など見えわたる。

いつの世にいかなる人の名をこめてうつし置けんふですての山それより関といふ所にいたる。町の中程に関の地藏とて名だたる堂あり。連の道者などまゐりける。われは旅のつかれにえまゐらず。

それより町はづれのわかれ道あり。左は江戸道右は伊勢道とて、太きなる二柱立ける。それをくどりて関川を渡る。わがなまさかしき心ばえには、いにしへ鈴鹿の関などあんなれば爰を関といへるはその跡ならんか。又此川も関川と名づけしはいよゝそれとをしはかられて、

五月雨の折はともあれ旅人をせきなとどめそ関川の水それより二里余りの道をたどりてむくもとゝいふ所にいたる比は雨猶頻りなり。扱それより二里余り過てくぼたといふ所につく。爰にて昼の食などもとめて又一里半ばかりたどれば津と云城下につく。町の長さ二里余りにてこよなふ足もつかれ、はづれの茶屋に休みて、又二里余りたどりて雲津と云所にやどる。

○二十一日。けふは朝よりとく空はれて二里余りたどりて松坂の町に入る。此間に雲津川とて渡しあり。長く町をたどりてはづれなる茶屋に入。かねて心にかけし本居大人の住給ふ所にあんなればあらましに此あるじに大人のことも尋わびて、又二里半余り行て榎田といふ所につく。此川水浅くて仮橋を渡る。又半里余行て茶屋に入、昼の食などもとめ、それより齋宮村につく。此所に齋宮の森の古跡、なりひらの歌よみ給ふなど原などあるよしなれども末の心いそぎえ行ず。扱夫より明星に又一やすみして一里ばかりたどりて小幡につく。爰より山田が原へは一里にして此間に宮川のながれ舟渡し有て、宮廻りの旅人など垢離かき、髪など結ておのれくの御師につく。われもうちつけに宮廻りするなれど、しばし此所にとどまるべき心ばへにしあれば、旅のうきかたちづくりもえせずて、かねてたのめうけひし事なんあれば、久志本神主の内人なる山口元右衛門久貞の家を尋えて、その久貞の伴ひにてこよひは久志本の館にやどりぬ。

○二十二日。けふは此程打つどきたる旅の足を休め、かつはわが伴ひつるふたりの道者の宮廻りして帰るを見をくりぬ。昼より久貞に伴はれてかの北御門益孝にまみえ、ひとつふたつ物語などしてかねて思ひかけける本居大人の学びの道びきなどたのめてしばし時をうつしける程に、あるじの志やつくしけんくさぐさのもてなし、はからず夜へ入し程にわがのもてあそびける蟹など庭の梢に飛ばし、とおかし。扱婦らん事をのべければ家の男に見をくられて出しが、又久志本家よりもむかへの男給りて、末の男は返しこの男に伴はれてその夜は又久志本の館にやどる。

○廿三日。けふはわが国の里への文書んと紙などもとめけるうちに、かの久貞、正木正光など伴ひ来りてかれこれ物しける。此正木正光は近き比まで年々わが里へ御被など納めにまかりて腸をあけあひし人なれば、わが此程此地へのほりける志の事など打とけて、三人鼻をさしあはせこまの物がたりなどしければ、正光のいひけらく、かく物し合し所はわがめぐりける能登なる旅屋に居るこちするなんめりと、そゞろにわらひ興じ立わかれぬ。それよりわが里への文こまのしたゝめければや、昼の程にも成なん。食などしてその文を久貞のもとへ持きてたのめつゝしばしかたらひけるうち、あたりなる友どちらしき人三人四人来りて、此程此地に興じける芝居噺などしてしばらく時をうつしける。程なくかの人々は婦り、あるじ久貞いひけらく、けふはこよなふうつしきけしきなり、是より町をはなれ世義寺へまゐらんと、すゝめられてわが持来つる身当りの服などぬぎかへて、あるじの羽織などかり着ていづれ此地の人めけるさまにしなして、かの町をはなれ田の畦道をつたひて山道の寺々をめぐり、所々に俳諧てふものしけるしれ物の碑など、かの人々の句など彫残しけるを見つゝ、たはこなどのみやすらひ二人

は句などして、扱南の坊といへるに入りぬ。すべて世義寺といへるは此所のをしなべての名にして四季折／＼宴をなす所なるよし。これに石風呂といへるものをこしらへて入ける。久貞いひけらく、かの風呂わがめぐりける能登などにはなき事にてと、しひてすゝめられて入けるに、下は石にしつらひその上ぬれ菰をかけ其上に簀子をはり下より火を焚。そのすの子に坐し匍匐などして湯気に蒸さるゝもよひなりと覺えて、扱こゝちよし。しばらく出ては又余程入り互に肩など吹合はその湯気にほとりて垢などかきて身をのぐひ茶などのみてしばらく眺望しけるに、甚の閑地にして向ふは兩御神の御山朝熊山など烈れり。その麓は豊宮崎とて大御神の御田などあり。かたへに大御神の文庫とて一つふたつ有。常に文庫守りとて居ける。月／＼に此文庫にて講尺案など有よし。文庫の屋根椽とてあり。春花の折は此坊にて見渡せばけしきいとおかし。けふは折しもかの文庫に糸竹のしらべなどありてほのかに聞えける。所がらくよなふ床しくて、

聞からに所がらとていと竹のいともかしこき人ぞ恋しき

扱かの坊を立出し比ははや夕つかたになりけり。久貞の家に伴ははれ食などしつゝ、又例の友どちなど打集へて四方山の物語しける。その中に年／＼出羽廻りの人ありて、かの象潟の物語などつばらかにしけるうち、あるじのもてなしとて、此所の名だゝる物とて、温飽といへるをしひられて、又しばらく物しける。けふ世義寺のもよほしいと珍らかにして此程のうきも打忘れておかしきいと限りなし。あるじいひけらく、此ほど一日二日のやどりはさだめて何か心づかひ有べしとて、わが庭の垣切透し侍れば、垣一へのあちらは久貞のゆかりある人のわき家の妻が住けるが、此程あきてあんなればいとしづかなりとて、此所にわれを今宵より侍りて、わが旅の手まはりなる

物、茶びん燈火机硯箱などまで持運はれていと情深し。久貞の戸母妻是もひとしく情限りなき人／＼にて、あるじにかはり深くわれをいたはり侍る事、わがなまさかしき心へにもさすがに人の人はしになんあれば、唯旅の談をしるばかりなり。

いくほどの世にながらへてかく迄の君がなさけを忘れやはするなどよみて、あるじ久貞にをくりぬ。

○廿四日。かのわき家にやすむ。

○廿五日。北御門益孝浪花へまかり侍る事有て、しばしの別れをのべ帰りぬ。

○廿六日。朝より雨降つゞく。外宮御大神の御田植の神事ありて、久貞外一人ふたり伴ひて先一の鳥居へ入る。左に御田道とて其所へ分入る。かの豊宮崎といへる御田のある所へ出る。大勢の神楽人素袍をり烏帽子など着して田のめぐらにをり立、笛鼓太鼓などにてうち拍子で何の祝こと申にかあらん、いにしへより伝へたる調ひ物して時を移しける。御田の道に黒木の二柱などかりそめに立給ふ。御子良子とて有。是は大御神へ朝よひかしはで奉り給ふ役なり。此御子此御田へ出て三本苗を植給ふ事古式なり。それより田の道を伝へて丸山といへる森に入てかの人／＼まゐり、かの社のまへに瓶にしめゆひひとよ酒作り備はりけるを土器にておの／＼いはひつゝ、それよりかの社の前に立置たる御田扇とて大きな扇五本をそれ／＼のやく／＼持立、そのまさきに棒振りとて老たる人かけ烏帽子に松の葉などかざし、腰に麻の前垂などして金色の棒持いたゞけ／＼と振廻しける。いづれ今し世のしわざめかづていとおかし。一より十までの祓宜は御田の上なる山に飯の殿作りしてつめ給ふ。一の祓宜より三の祓宜まであげ輿といふものに乗給ふ。四の祓宜より十の祓宜まで馬にて衣冠たゞしくはこび給ひてい、としめやかなる五月

雨の折にぬれてかしくみく／＼覚ゆ。

御田植の時や来ぬると久方の雨をうるほす伊勢の神風

○廿七日。けふは芝居見に物せんと三人四人打つどへ妙見町を通りぬけ、倭比咩のかくれましましけるかくれの岡など過て、かの芝居に入り日を暮し、田の繩手など通り螢飛かふさまなど見やりて昼のいきりをさましつゝ時を過して帰りぬ。

○廿八日。けふは例の石風呂などに入ると三人よたり伴ひて、世義寺の腰を通りて柿の木多く並立ける里を過て蓮台寺といふ坊に至る。土地もの静にして風流の好ものなど折／＼集へる所となん。あるじの僧雨戸などはづして奥へすゝめられける。石風呂の程など尋て穴風呂に入時をうつしける。それより又坊の坐敷に入り茶飯竹の子なんどもてなされて薄暮の比になん帰りける。道すがら螢の飛かふさま小嵐につれていと涼し。それより又婦さに世義寺のうちなる積法寺の開帳いとなみにぎはし。道すがらの燈火などかぞへてやどにかへりふしぬ。

○廿九日。けふはあるじ久貞わが道びきのためとてかの松坂のゆかりのかたへおもむき侍る。わが此程宮廻りなどおこたり侍れば此程むつびあひける人に案内たのめてまづ外宮豊受皇大御神の広前にぬかづき奉り、それより五社の大社のなど廻り扱八丁程よちのほり天の岩屋高天の原など拝みて茶所に入る。此所ははる／＼旅人の道のくるしみを休めんため茶を焚てすゝめける。すべて此御山のうちにても此所は高みにて近くは山田が原の人家まのあたり見渡され、遠くは大湊二見が浦桑名宮の渡りまでほのかに見えわたる所にて、けしきこと所にまさりていとおかし。爰にて大御神の広前にいやまひをなせし歌よめる。

片掬のちぎり久しきみづ垣のしめしにもれぬ御代の豊けさ

又外宮の百枝の松内宮の千枝の杉など思ひ出て、

千枝の杉百枝の松のことの葉のつきせぬ色は神のみぞしる

それより余程道を下り豊宮崎の文庫の前へ出て、町筋を伝ひぬけてあべの山古市など過て宇治橋にいたる。橋姫の宮橋の横にあり。此川を五十鈴川といふ。それより一の二柱を越て右手にいと清き川の流れあり。是を神路川といふ。それより二三の鳥居を越て内宮大照皇大御神の広前にぬかづき奉りて、所／＼の大社見廻り御子良子の館など拝みて、又少き橋うち渡り風の宮にいたる。此川やかの倭姫の命の裔をぬらし給ひけんより名つゞけける御裳濯川の流れなり。それより御馬屋などへ出てもとの大橋のもとへ出る。此辺り林崎の文庫もあんなれどえまゐらず。すべて此両大御神の御敷地のうちにてこれかれこと／＼の名だゝることどもあんなれどえ尋ねずて、わが兼て此道草に五十鈴の道しるべと名づけしも爰になん、いすゞ川神のむかしの道わけてそゞろにぬるゝ袖ぞ涼しき

それより帰るさ茶屋に入り伴ふ人なんどゝ食をもとめけるうち、雨頻りに降きて此所より傘などかりてかの久貞の家に帰りぬ。其夜わが里より帰りしとて北御門氏の代人岩田周藏といへる、我里の文など持来つゝ、くり返しながめていとうれし。

○晦日。けふはやどりにやみみぬ。あるじ久貞も松坂より帰り侍る。

○朔日。昼の程はやすみぬ。暮より例の人／＼にともなはれて世義寺の要流堂にもうづ。かへるさに豊宮崎の花火など見つゝそゞろ□を更してふしぬ。

○二日。かの松坂におもむく事になりて、あるじ久貞のいひけるはかねてかの地たのめあひし事なれど道すがら末のかり住居の程も寛束なくとて、隣にすまひける伊八といへる人をたのめてわれを伴ひけるよと、いとこまやかなるこゝろばへの浅からずて暫く別れの袂

をしぼりつ。道すがら此程かたぐい見廻りける所ぐの物がたりなどしつゝ行程に、昼の比になんつきける。かねてたのめけるかたとありしは久貞のゆかりにて、所は魚の町松屋喜兵衛といへる人にて年は四十余り也。業ひは靴味噌などとりあつかひける。すなほなる心ばへのやうに寛ゆ。妻なる人も三十年の上もなき程に見えていと和らかなるやうに寛ゆ。此程久貞のたのめ置れける事共いやまひをのべてしばし足をやすめ、髪結袴神服など着て本町豆腐屋十助といへるもとを尋ける。かの本居大人の弟子にて稲掛の太平と聞えしは此人なり。北御門益孝より文にてかねてたのめ置侍りし事などのべて、大人へ道引の事などいひて、かの太平が伴ひにて大人にまみえつゝ、帰りに食などしてかのかり住居へ落つく。所は大工町山作家の裏家にて四疊半の簀子敷に蓮敷渡し、蚊帳つり茶たき燈火を明してその夜はふしぬ。

○三日。とく起てかの松屋へまかりて山田より伴はれける人を見送り、その夜はかねて大人の物語にて万葉集の講尺あり。日暮よりかの大人の席につきおのゝくに伴れ帰りふしぬ。

○四日はかり仮居に文など見て暮しつ。

○五日。昼より愛宕町なる少彦名の社に大人出給ひて、玉くしげの講尺有。日野町なる書林柏屋兵助といへるより人たのめて、かの席につき夕つかたに帰りぬ。

○六日。又日暮より大人のもとに源氏楨木柱の講尺ありて、かの席につき帰りふしぬ。

○七日より十五日迄は此所かたぐいの祇園祭とて、講尺もしばらくやみぬと大人の結ふ。昼よりあるじにしひてすゝめられて筋り山柏子物など見ける。帰るさに紙筆などもとめつゝ大人の著し給ふ物共写しかゝりぬ。

○八日。夜に入り圍もと山田などまかりける嘶しのつなにもと松屋□□しひられて此所の祇園鎮り給ふ宮ぐにもうで獅子舞、踊り子、あやつりと見て夜を更しかへりぬ。

○九日より十日、十一日迄写し物にかゝりぬ。

○十二日。又山田へ学び事につきたのみ事など有ておもむく。此夜古市の御岩の觀音に伴はれてもうづ。

○十三日の夜は例年宮川の辺りに花火有て、男をみなの袖すり合ていとにぎはし。川向の里ぐは松明ともし鉦うち太鼓などゝたゝきて虫をくりす。宮川の河原にはらばひ夜を更してかへりぬ。

○十四日はやすみぬ。

○十五日。岩田氏に伴れて二見にまかりける。二里あまりの平地を行てかの所につき、茶屋に手向の注連繩などもとめ、潮にぞみて着物ぬぎ垢離かきて奥玉の神を拝み奉る。

いせの海二見がうらのふたゝびと逢見ん人はなつかしおもほゆ渚に海士の子が代垢離かきもしほ草を売をもとめて、

玉くしげふたみが浦の藻塩草こゝろやさきにきよむといふらん少し道をたどりてなかる屋といふ茶屋に昼の食をもとめ酒などもてはやして出たつ。又余程松原を行て御塩殿にまゐる。夫より所の賤の女にかの浜萩の所を尋て見つるに、今は野原なる所に名のみわづかかた葉のあし残れり。今し浜萩の軸の筆など此所の名だゝる物とて出ける。

神風やいせの浜萩音にのみ聞こし程もいまぞしらるゝ

夫よりかの二見戻りのしるしとて、此あし二本三本折持もしほ草など持そへて、かの久貞の家に帰りぬ。

○十六日。昼のうちはやすみて夜に入り外宮おほみかみの祭りを拝み奉る。庭上に十の祢宜玉串の役子良の館衆など烈座なり。大宮

司は宣命を上げ奉らる。山田奉行は玉垣の外に平座し給ふ。此間篝火焚しておのくこまりける。人くたゞ無言にしてかしこみの頭をならぶるばかりなり。ことおはりてかへりぬ。

○十七日。けふは網うちに出んと久貞外の友人おのれと三人連にて川崎といへる所につく。これより舟水子などやとひて上やしるといへる所まで舟さし網うちて、しばし時をうつつしけるうち魚を打□□その魚を舟の中にて料り食などしける。それよりかの入江くをへ□□、日も夕くだりになりぬれば舟さし帰りもとの川崎につきて、網籠など荷ひて帰りぬ。

○六月十八日。けふはもとの松坂に帰りぬ。それより後の七月九日の夜まで松坂にありて学びごとのみにいつける。

出席の折くのみ歌大人御点ありしうつし

夏月 『小西四郎左エ門へ贈』

『師点』風まつとくれぬる空をながむればはやくも更る夏の夜の月

夕顔 『越中富山飄庵集に入』

『師点』かりにだに人もとひこぬ山賤の垣ほにさけるゆふがほの花

芽子 『松坂殿邑安守へ贈』

『師点』宮城野にさける秋はぎわがこふる妹が袂にすらまくおもほり

同

『師点』秋はぎの花咲ぬれば此ころはまちかくぞ聞させしかのこゑ

朝顔

『師点』此あさけ露もまだひぬ我宿のまがきにさけるあさがほの花

女郎花 『松坂竹屋嘉右エ門へ贈』

『師点』秋風になびくを見ればをみなへし心あだなる花にぞ有るべき

待恋

『師点』夕暮の萩の上風まつ人のくるかとのみぞあやまたれける

津の家中より賀の歌なりとておのく松の歌をよみてをくる

松

『師点』とこしへにみどりかはらぬ松がえの千代へむ色はかやしてしるも

六月十七日遍照寺月次兼題

夕立雲

『師点』立さわく風にきはひて山のはをはやくもすぐるゆふだちの雲

六月廿五日嶺松院月次兼題

泉

『師点』松風の音もかよひてむすびあぐるたもとすどし山のるの水

おなじく当座題

寄鏡恋 『小西四郎左エ門へ贈』

『師点』いとせて恋つゝをればますかどみおもかげにも見るよしもがな

七月十七日遍照寺月次兼題

初秋

『師点』わがやどの草木うごかし此あさけ秋たちきぬる風のすゞしき

おなじく当座題

行路薄

『師点』旅ころも行手の風になびきあひて野への尾花の露ぞ乱るゝ

七月廿五日嶺松院月次兼題

野外露

『師点』夕まぐれ秋の野原に風吹は草葉の露ぞちりちり乱れける

おなじく当座題

山家暁

『師点』山里やねざめてきけば暁にこゑのきはみと鹿も鳴なり

わがかり住居のあたりに竹屋嘉右エ門とてめぐさをたつぎにしける。此人まつしき身ながらなき深き人にて、わが此住居にいつける

うちもかれこれ心にいれてその日／＼の料理物おくりける。そのたづきのいとまなきにも朝顔をめでゝ朝な／＼まがきに出てながめける。その心ざしによりてよみておくるうた、

世の事のしげき中にも朝がほの露いとまを見る人ぞ見る

松屋の向ひに桔梗屋半兵衛とて、狂歌好の人あり。わが歌の心ざしをしを聞いて歌たのめけるによみておくるうた、

むらさきの花のゆかりの宿なれば君がこゝろを染まくをしも

○後の七月九日。わがかり住居をしまひて、あたりのむつびける人／＼にいとまをのべその夜は松坂にやどりぬ。

○十日。山田へまかる。夜のうちに人やとび書物などもたせて、一里余も明ぬうちにあゆみぬ。四つ時比に久貞の家につきやすみ、やとひし人も食などして帰りぬ。わが故郷へ帰るによてかれこれたのめことども有て日を過し、十六日の昼より久貞に宮川までをくられて、夜に入り松坂に帰りぬ。その夜に大人その外学びのどちにいとま申ける。その中に過にし山田へわがまかりし比、下總の檀林づめの僧とて大人につき給ふ。此僧とりわけ腸をあかしあひし人なりしが、そのよあひ見ずしてその明日の日わらんず笠とりながらま見えてわかれぬ。大人はじめおの／＼わかれの歌など給りて、又かへり

□□事をうけひてその夜は又松坂にやどりぬ。

○十七日。けふは雲もはなやかにほれ、あるじの妻子下おみななどにこま／＼のなさけにあひし事どもいやをなして、わらんじはき笠とり持てその松屋のあたりいとまごひし、柏屋に又本などもとめてあるじ喜兵衛に大橋のもとまで見をくられて、わりなき別れをおしみて今より故郷へおもむくこゝちになりぬ。

餞別

宣長

けふはかくわかるゝ君を悔しくも能登の嶋山のどにぞ思ひし

返し

吉彦

わかれても又かへりこん松坂にちよもといのる君しいませば

閏七月十日比上野介吉彦君の能登国にかへりたまふをおくる

伊勢の国この松坂に月日経て旅居しました能登の国ふゝしの郡宇出津とふ里にいつける酒垂の神の社につかへますかとうの君の今ほとど帰りますらく別しをしも

稲掛大平

雁がねはわれてこちこむ秋しまれこし路をさして帰る君かな

加藤君の閏七月十日ごろ国にかへり給ふによみてまゐらす

殿邑安守

衣手に初秋風のふきくれば困思ひ出ています君はも

別るとも能登のしま山しまらくも吾はわすれじなわすれ吾兄

送別

中津元義

雨雲のそぎへのきはみへだつともまさきくまさばまたも逢みん

吉彦のぬしを送り奉る

孝寿

まつぎかにあひしむかしを思ひ出て風のもも音づればせよ

此うたは下總の檀林詰の僧宗旨蓮宗名は孝寿といふ。

寛政九年八月のはじめ帰郷のうへしるしつ

餘紫被高(印)

此日記は寛けきまつりごとの九のとせのさ月はじめつたかた、神風の伊勢の国千とせよこもる松坂の里本居宣長のうしに、石の上古ごと学びせし道行ぶりの何やくれやかきつめたるを、それが国の名におへて、千尋の浜ぐさとなんなづけつ

あつめてもかひやなからんいせの海の手ひろの浜のあまの捨草

鯉子

解説

加藤吉彦自筆による袋綴私装本、一冊。縦24・3センチメートル、横17・2センチメートルの半紙判。本文二十一葉、跋文一葉、計二十二葉からなる。一面の行数は十六行で、総その他はない。

表紙は、龍の模様紙と白・青色紙が横段に貼り合わせてあり、題簽に「和歌日記」とあるが、字体は本文中の字とは別筆である。扉は白紙で、内題などない。本文の冒頭には陽刻「青雲等鳥飛」の印がある。

奥付は、本文最後に「寛政九年八月のはじめ婦郷のうへしるしつ」とあり、陰刻「餘紫」陽刻「被高」の印がある。題名は、跋文に「千尋の浜ぐさとなんなづけつ」とあるのによつた。

次に、本書の価値について簡単に触れておく。本書は、著者が宣長に入門するに至った動機、入門の手順などが具体的に記述してあり、伊勢神宮の神官たちが国学の普及に深く関係していたことが知られる。そしてまた、宣長に直接つてのない地方に住む人間がどのような方法で宣長の門下生になっていったか、一つの典型的な例を示しているとみなすことが出来る。立場を換えて言うと、宣長一門が、どのような形で全国から門下生を集め、国学を地方へ普及させていったか、その一実例としての意味を持っていると言える。

また、松坂・山田までの詳細な道中の記述は、当時の旅の実態——旅のコース、日程、距離、宿泊の事などの他、道連れのままなども含めて——を窺い知ることが出来る。さらに、山田滞留中の見聞、たとえば、御田植の神事や岩風呂の経験などは民俗学的な参考になると思われるなど、いろいろと当時の風俗・習慣、地理的条件などの実態をありのままに知ることが出来る資料的価値がある。

作者、加藤吉彦は石川県鳳至郡能都町宇出津にある酒垂神社の第

十二代宮司である。宝暦十二年（一七六二）生れ、没年は不詳、「源氏物語」の注釈書「月の後見」の跋文に「よはひ七十四歳」とあるのが、確認出来た最終の記述である。略歴はほとんど不詳であるが、現在わかっていることの中、宣長との関係について次に述べる。

「鈴屋門人録」に「寛政九年丁巳 能登鳳至郡宇出津 六月 加藤上野介吉彦」とあり、本書の記述が傍証されるわけだが、この年宣長六十八歳、吉彦三十六歳にあたる。この時は松坂にあって宣長の講筵の席につく一方写本したもののうち、「万葉集 玉の小琴一」と「同追考一四」、「答問録」などが現存している。

さらに、二年後の寛政十一年の春（四月／六月）、再度宣長の膝下に赴いたが、この時写本したものに「源氏物語玉の小櫛一七九」「百人一首改観抄」「五十連声」「七家七論」がある。なお、この年の秋、宇出津から常椿寺の僧抜山をはじめ四人のものが宣長に入門を許可されているが、この手引は勿論吉彦がしたものであろう。寛政十一年十一月廿六日付けの宣長の吉彦宛手紙（無谷健夫氏所蔵）には、「此度抜山子来入始而致対面候」と言うことが、宣長の近況報告「著述物此節宣命解ニかゝり居申候。来春ならでは出来不申候」とともに記されている。

その後、宣長との関係を示す手がかりは現在のところないが、吉彦の晩年の著作物の中に、宣長の面影を偲び、それが動機となって著述されたものがあるので、そのことに簡単に触れておきたい。

天保二年、吉彦70歳の年、歌集「四ひらのやま水」をまとめている。これは「雲のしたくさ」（四季富士百首）「鳩のかよひち」（淡海五十首）「ちまたのさゆり」（吉野百首）「波の文牆」（無田百首）をまとめたものだが、最初の「雲のしたくさ」の序文に（宣長が）「老の夜長をたすけばやと『枕の山』と名づけて、桜三園をつらね給ふ。おの

れその例にならひて、今年七十のよはひ重ねあげつゝ、四季、恋、
雑と六くさにわかちて富士の百首を物しつ。」と書いていることな
どがその例と言えよう。

さらに、天保三年九月から同六年閏七月（71才〜74才）にかけて
ようやく完成した「源氏物語」の注釈書『月の後見』は、当初「湖
月抄」に「源注拾遺」と「玉の小櫛」説を付加したものを意図して
いたが、実際には大部分が「湖月抄」に「玉の小櫛」を書き加え
ただけのものになった。この「玉の小櫛」と言うのは、吉彦が再度松
坂へ赴いた時写して来たもので、彼には意義の深い書物であった。

吉彦は、宣長への入門などが契機となって、宇出津を中心とする
地方の有識者として中心的な活動をしたものと推定される。現在、
吉彦が遺した写本は八十六種、一七〇冊保存されているが、書写年月
が明記されているものによると、その期間は寛政三年（30才）から
文政十一年（67才）にわたる。なお、その種類は、国学・和歌が中
心であるが、必ずしもそれに限定されず、広く文化一般にわたって
いる。また、吉彦は俳諧にも造詣が深く、二十代は俳諧の方にむし
る関心があつた。二十五才の時、伊勢参拜の帰途諸国を巡って歩い
たが、その折のメモ帖には発句が記されている。「つみは柏」「後
のつみは柏」と言う連句集が浄書されて残っているが、これらも二
十代の作品と思われる。

備考一、加藤吉彦については、拙稿『密田教授退官記念論集』（昭

44）に「本居宣長の門人加藤吉彦について——入門の記、千尋の浜
草」と源氏注釈書『月の後見』を中心として——」があるの
で、参考にしていただきたい。

二、加藤吉彦の著書、写本は、現在能都町郷土館に展示してある。

三、本書の翻刻にあたっては、殿田良作氏・小林篤二氏の仕度本
を参照させていただいた。両氏に厚くお礼申し上げます。な
お、いろいろとご教示いただいた本大学の室木弥太郎先生、深井
一郎先生、原本をお貸しいただいた河村喜平氏の方々にも深く
お礼申し上げます。

（金沢大学教育学部助手）